キースとリンディーの魔王捜索

yumesato

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キースとリンディーの魔王捜索

【Ｎコード】
Ｎ８４４２Ｘ

【作者名】
ｙｕｍｅｓａｔｏ

【あらすじ】
剣士キースと魔法使いリンディは、最近復活したと噂される魔王を探すための旅に出る。果たして二人は魔王を探し出すことができるのか。

ゴブリン討伐！

早朝。森に囲まれた小さな村。その日の早朝、いつも静かなその村は喧噪に包まれていた。

「魔物だー！」
「魔物どもが村を襲いかかってきたぞ！」
「数は約５０！　敵はゴブリン共です！」
「またかっ！　ここ最近、魔物の活動が活発になっていないか！？」
「確か、先月も隣の村が魔物に襲われたらしいな。やはり魔王の復活の噂は本当だったというのか……？」
「そんなことより、まずは村を守ることを考えろ！」

◇◇◇

宿屋。
一人の少年が、宿屋の個室から部屋に出る。
身長は１７０位で、髪は茶髪。目の色は淡いブルー色だった。
その少年は宿屋のカウンターにいた少女に話しかける。
「あ、おはようございます。キースさん」
「おはよう……今日は外が妙に騒がしいようだけれど？」
「えぇ……なんでも、魔物がこの村に襲いかかろうとしているみたいで……」
「魔物！　……それは大変だな。リンディーはまだ起きていない……起きているわけないか」
キースは2階へと向かいキースが寝泊まりしている部屋の隣のドアを開く。
「起きろリンディー！　魔物の襲来ですよ！」

「う、う～ん？」
リンディーと呼ばれた、幼い容姿をした少女は寝間着姿のまま体を起こす。
眠いのか目を虚ろにさせている。そんな少女の髪は綺麗なライトイエローの長髪。そして
幼さを思わせる童顔。目の色はキースと同じ淡いブルーだった。
「全く相変わらず朝が弱い奴だ！　ほらとっとと起きる！」
軽くリンディの柔らかい頬を2，3回ひっぱたたく。
「う～、キースさんひどいです。可愛らしい乙女の頬を叩くなんて！」
「お前が起きないのが悪い！　それより緊急事態だ！　魔物がこの村を襲おうとしているらしい」
「へっ！？　そうなんですか！？　そういうことは早く言ってください！　さぁ、さっそくその場所まで向かいますよ！」
「おい、お前！　寝間着のまま外に出るつもりですか！」
「えっ、あっそうでしたね。慌て過ぎちゃいました、えへへ」
「えへへじゃない！　さっさと支度しろ！」

◇◇◇

村、北門。
「思ったよりも凄い数ですね」
「あぁ、５０と聞いていたがそれよりも数が多いようだ」
肌が緑色の不細工な顔をしたゴブリン達が群れをなして村へ進撃してこようとしている。
ゴブリン達が手に持つ武器は、刀、剣、弓矢。それらはどれも人が使う武器と全く同じ物であった。
「そういえば」

「ん？」
「何故ゴブリン達は、武器を持っているのでしょう。彼らに武器を作る知識・技術はなかったと思いますが」
「あぁ、魔物達は人々の戦争の跡地やら廃村から武器を取ってきているらしい。全く、戦争をするのは勝手だが後始末はちゃんとしてくれって感じだよ。っと、さぁお喋りはここまでだ。さっさとあの魔物連中共を片付けて朝飯にしますよ！」
「ふぅ……しょうがないですね。早々に終わらせちゃいます！」
そして一人の剣士と魔法使いはゴブリンの群れへと向かっていく。

「リンディ、強化と属性付与の呪文を頼む！」
「おまかせです！　えっとっ、彼の者に力の強化と火の属性を付与！　ストロングフレイム！」
適当な呪文と同時に杖をリースの方に振る。
「ありがとう！　……さて、攻撃開始だ！」
キースは鞘から剣を抜き出す。その剣はリンディの魔法により付与された魔法により真っ赤に燃える炎を纏っていた。
「喰らえっ！　炎龍剣（えんりゅうけん）！！」
剣を振ると、剣から龍の形をした炎がゴブリンの群れに襲いかかり、そして彼らを焼き尽くす。
「キィアアアアア！」
炎に纏われた敵達は、悲鳴を上げながらそして灰になっていった。
（相変わらずリースの能力付与の能力は恐ろしいな……）
さっきの一掃で、９割近くのゴブリンは焼き殺された。
残った魔物達は、二人に恐れをなしたのか武器を捨て逃げ去ってしまった。

「ふぅ、あっけなかったですね」
「あぁ、お前のおかげでな」

キースはそういいながらリンディーの頭を優しく撫でた。
そしてリンディーはそのキースの行為に、心地よくなっていった。

「しかし、多いですね。最近。魔物が村や街を襲う事件が。ほら、先週も今回のようなことがあったでしょう？」
「あぁ……魔王が復活したという噂があるが。本当かもしれない」
「キースさんはそれを確かめに行くんですよね」
「あぁ……それが俺の役目だからね」

ゴブリンの群れを退治した二人は村へと戻っていく。
その日、村の人々はキースとリンディーを村を守った英雄として話題となるのであった。

二人の出会い

◇◇◇

「ついに魔王は倒された！」

その日、魔王は勇者によって倒されたという。最初は噂だけだったが国から正式な発表があった瞬間。

世界は歓声に包まれた。

「これでもう俺たちは、魔物達に襲われなくて済むんだ！」

「もう私達は平和に暮らせるのね！」

長きにわたる魔物達の支配から解放された人々は、心から喜びそして世界を救った勇者は称えられた。

しかし勇者は、首都アルヴェリアに三年ほど滞在し、魔物達によって壊された村・街の復興に尽力していたが

ある日忽然と勇者およびその一行は首都からいなくなった。

それが今から約１０年前の話――

◇◇◇

宿屋の自室。

キースとリンディーは互いに向き合う形で椅子に座り、テーブルの上に置かれているご馳走を食べていた。

「しかし、宿代がただになったのは嬉しいよ。誰かさんのおかけで金欠だったからね」

キースは少しずつパンを千切り、千切ったパン切れにスープを浸し口へと運ぶ。

対するリンディーは手当たり次第、ありとあらゆる料理をバクバクと食べていく。

「んぐっ！　その誰かさんというのは私のことですか！？」
「君以外に誰がいるんだよ！　全く君という奴は勝手に高級料理を頼むし、この間だってシルクの服を買っちゃったりしてるし！」
「だって欲しかったんだもの！　それに私その分働いているつもりだよ！」
「うっ……それは、確かにそうだけどさ……」
「じゃあいいじゃない！　キースももっと欲張るべきなんだよ。お金のことなら心配しないで、私がいればすぐ稼いじゃうから！」
「すぐ稼げるかもしれないけれど、僕はもう少し君に節操というものを知ってもらいたいよ……」
「せっそう？　なにそれ、食べ物？　おいしいの！？」
「はぁ……」

キースはため息を一つつき、再び食事をする。
食事をしながら、キースはリンディーの顔をただぼんやりと眺める。
（そういえば、リンディーと会ってからもうすぐ1ヶ月か……）
キースは初めて、リンディとあった日のことを思い出す。

◇◇◇
真夜中、どしゃぶりの雨の中、キースは森の中を駆け抜ける。
「はぁ……はぁ……くそっ！　今日は付いていない！」
キースの後ろには二人、彼を追いかける者がいた。
「こっちだ！絶対に逃がすな！」

（もっと早く森を抜けるべきだった！　まさかこんなところで狙われるなんて！　どこか
どこか早く身を隠せる場所を探さないと！）

……周囲を見渡す。暗闇の中、見えるのは生い茂った草といつまでも続く闇。
しかし、黒の中に淡い青が見えた。そしてその光の中に教会らしき建物が建てられていた。

（あの淡い光は？　それにあの建物は教会……？　でも、どうしてこんなところに？
……もしかしたら中にだれかいて匿ってくれるかもしれない……いってみるか……）

たどり着いたのは教会。こんな深い森の中に教会があること自体が異常だったが、中もまた異常だった。
「外観は何百年も忘れられたかのように朽ちていたのに、中はそうでもないみたいだ……」
そしてひときわ異常だったのが、祭壇から放たれている青い光。
キースはキースは祭壇に近寄る。そしてそこにあったのは異常な光景。

（少女？　死んでいる……？　それにしては綺麗すぎる）

白いローブを着たまま祭壇に仰向けになっている少女。髪は空に浮かぶ月のような色。
子供のように小柄で、ここにいるのが場違いなようなそうでないような、奇妙な感覚。

（この少女は生きているのだろうか？）

生の感触を確かめるために彼女にそっと優しく触れようとする。しかし……

ぎぃ……と教会の門が開く音。そして現れたのは一人の男。さっきまでキースを追い続けた男だ。

「変な光が見えるから来てみれば、こんなところにいたか……。くくく、せめて隠れていれば見つからずにすんだものを」

「くっ……」

「さぁ、その腰に捧げている剣を渡してもらおうか。そうすれば、命だけは助けてやらんでもない」

「いやだ！　この剣は大事なものなんだ！　お前みたいな奴に渡すわけにはいけない！」

「そうか……残念だ。ならお前はここで死ね」

男は銃器らしきものを構え、キースの方へと向ける。

「それじゃあ、さよならだ……」

男はトリガーを引く。それと同時に放出された鉛色の玉がキースの体に襲いかかる。

キースは目を瞑り、思わず死を覚悟した。

……。

しかし、男がトリガーを引いて数秒しても、キースはまだ生きていた。

それどころが痛みも感じない。

恐る恐る目を開けると、目の前で鉛玉が空中で制止していた。

呆気にとられていると、背後から声が聞こえてきた。

「せっかく眠っていたのに、うるさいなぁ……」

「！？　なんだ貴様は！」

キースが背後を覗うと、そこにはさっきまで祭壇の上で眠っていた少女。

彼女は不機嫌そうに、銃器を持った男を見据えた。

「おじさんだね……さっきうるさい音を立てたのは……」

「だ、だったらどうだってんだ。お前も死にたいか！！」

男は銃器を、少女の方に向ける。

「あー。たぶん無理だと思うよ。それじゃあ私は倒されないと思う」

「なんだと！　馬鹿にしやがって！　死にやがれ！！」

躊躇無く引き金を引く。再び銃口から鉛玉が発射され、今度は彼女の方へと襲いかかった。

しかし彼女に届く前に、玉は見えない壁にぶつかり跳弾した。

「何故！？　何故当たらない！」

「それが私の能力みたい？　自分でもよく分かっていないけれど」

少女はおどけた口調で言う。少女には危機というものを微塵も感じていないようだった。

「そんなことより、心地よい眠りから覚ました者には罰を与えないとね……。

えーと……ここではない何処かへ、消えてしまえ！　”存在抹消（デリート）”！！」

詠唱とはいえない詠唱を唱えると、銃器を持った男は白い光に包まれる。

「な、なんだ……うわぁ！！」

それは一瞬だった。
白い光が膨張し教会全体が白に包まれ、男の短い悲鳴。その白い光が消えたときには
男はその場から消え、残ったのはキースと謎の少女二人だけだった。

「ふぅ……。よく分からないけれど、もう大丈夫だと思うよ。って、おーい？　聞こえてる？」

目の前の出来事に理解が追いついていないキースは少女に声を掛けられてようやく我に戻った。

「……あ、ごめん。えっと、助けてくれてありがとう」
「えへへ、どういたしまして」
「それで、えっと、君は何者なんだい？」

すると少女は少し困ったように答えた。

「えっと、私の名前はリンディー。それ以外のことは分からないんだ」
それがキースとリンディーの出会いだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8442x/

キースとリンディーの魔王捜索

2011年10月29日03時18分発行